

〈序章〉

しかるに、小生は多年間夢のことを研究す。錢もなにもいらぬ研究ゆえ面白し。これにはいろいろ経験せしが、すべて夢さむるときに身をちょっとでも動かせばたちまち忘るるものなり。故に小生はもっともくせを付けて、夢さめてのちすぐにとび起きてこれを筆するよりは、依然として夢みしときの位置のまま臥しおり閉目すれば、今見し夢の次第を記憶し出だし得るということを発見せり。たぶん夢見るときの脳分子は不定の位置を占めおれば、ちょっとでも動けばその順序常に復するというようなことと存じ候。さて小生は多年の間かくして多くの夢を記しおけり。

[1893年12月21～24日付土宜法龍宛書簡] (『全集7』p.142)

第1節、目的

南方熊楠（1867～1941年）とは、いったい何者なのか——。民俗学者か、生物学者か、それとも粘菌研究者か、あるいは博物学者か、はたまた性愛学者か。桑原武夫（1904～1988年）や益田勝実（1923～2010年）のように「熊楠には理論がない」と言う者もいれば、鶴見和子（1918～2006年）のように、はっきりと「熊楠には理論があった」と述べる者もいる¹⁾。ある者は「森の巨人」と言い、またある者は「実は小心者」であったと言う。約15年に渡って海外（アメリカ・キューバ・イギリス）を放浪したかと思うと、後半生は田辺から殆ど外に出ることはなかった。また、奇人・変人と呼ばれながらも、礼節・義理人情は非常に重んじる場所があった。熊楠自身は自分のことをロジカルな、そして科学的な思考の持ち主だと考えていたふしがあるが、彼の日記・書簡・論考などからは、明らかに神秘思想主義的な考え方が覗かれる（ここまで来ると、「熊楠」という名前も、動物の「熊」と植物の「楠」という両極端な語の合成なのは、単なる偶然ではないように思えてくる）。——このように熊楠は、あまりにも「振幅」が大きすぎる人物なのである。それが我々を惑わし、南方熊楠という人物像を見えにくくしている。作家・神坂次郎は、

天衣無縫ともいうべき熊楠の行動は、振幅が大きい。いま先刻まで腰巻ひとつの半裸で狂気のように研究に打ちこんでいたかと思うと、こんどは浴びるほど酒を飲み、ふらっと採集にでかけたまま十日も二十日も帰ってこない。たまに帰ってくると、家じゅうにばらばらしらみ虱を落として歩く……

[神坂 1987 : 311] (傍線—唐澤)

と、熊楠のことを的確に述べている。言い換えるなら、熊楠の居た場所は、いつも「ラジカルな場所」だったのだ。熊楠という人間は、「極端」を生きることしかできなかった（このような傾向は、やはり熊楠の書簡・論考にも見られる。或る話題から違う話題への突然

¹⁾ 桑原は「彼【熊楠】が一本の理論体系を持たぬということは……」[桑原 1972, 飯倉編 1974 所収:13]([【】内—唐澤)と述べ、益田は「南方のこの博識は浪費された知識ともいえないだろうか。…(中略)…理論加工がない。」[益田 1968, 飯倉編 1974 所収:32]と述べている。一方、鶴見は、「南方曼陀羅」を指して「わたしは、南方には理論があったと考えている。」[鶴見 2001:118]と主張している。

の、そして極端なジャンプである。これが、彼の文章を我々読者に非常に読みづらいものにして理由の一つでもある)。上記した熊楠像は全て本物であろう。しかし、我々には、そのような熊楠の「在り方」が驚きであり、不思議であり、ある種不気味なものでもある。なぜなら、我々は常に「中間」において他者と関係を保っているからである。「曖昧さ」・「適当な距離」を知らず知らずのうちに保持しているからである。いわば、我々は「極端」と「極端」の「間」の場所に居る術を、暗黙的に身につけているのだ。そして「社会」では、それが「正常」な「在り方」だとされている。また、我々は、そのことをあまりにも当然なことだと考えている。否、「中間」で他者との関係を保っていることを意識すらしていない。だから我々は、熊楠の「在り方」を理解することができないのだ。しかし「中間」というものを当たり前だと思っている我々が、熊楠の「在り方」が驚きであり不思議であるのと同様、熊楠にとっては、「中間」に容易にポジション設定している我々の「在り方」が驚きであり不思議であったに違いない。

熊楠は、粘菌などの研究対象と一体化してしまう程の（瞬間的には一体化していたであろう）気質の持ち主であった。対象との一体化、それは熊楠の自我が対象に吸収されてしまうことを意味する。自我消滅（エクスタシー）の場には、安穏と平和がある。それと同時に、争いも対立も区別もない。そこは「無」である。そして「無」は「不安」を生む。「自分というものを完全に失ってしまうのではないか」という「不安」——それは人間に、自我消滅の場＝「一様性」という「巻き込まれ」から脱出しようという衝動を生み出させる。人間は、自我の完全な消滅を避けるがために、そこから抜け出そうとするのである。そして、そこから脱出すると同時に、再び自己の居場所（ポジション）を設定する（社会・文化の「枠」に従って）。しかし熊楠の場合、その居場所は、他者との「距離」が極めて「遠く」になるよう設定されてしまっていた。それは、おそらく、対象との極度の一体化の反動だったと言えるであろう。人間は、自我消滅の危険性の度合い（対象との一体化の時間の長さ、あるいは一体化の密度の濃さ）が大きければ大きい程、再び自我消滅の危機に襲われることを防がんがために、対象から「遠く」離れてしまうようである。その結果、他者の気持ち・考えなどに対し鈍感になり、「逸脱」行為へとつながることになる。熊楠のいわゆる奇人・変人的行為は、他者から極端に離れ、他者が殆ど見えなくなってしまった結果であった。また、他者が見えなくなるということは、同時に自己も見えなくなるという

ことでもある。他者の喪失が自己の喪失に直結することは言うまでもない。そして自己喪失の「不安」に駆られた熊楠は、再び対象に接近しようとする。対象に接近する（向かおうとする）理由は、もう一つある。それは自身の欠落した部分を補完するためである。欠落したものを埋めて「完全性」を希求することは、人間の、持って生まれた「生のエネルギー」とでも言うべきものである。熊楠の場合、その欠落したものとは、一言で言えば「アニマ anima」であり、具体的には夭折した羽山兄弟や、粘菌の原形体であった（第2章及び第5章参照）。

熊楠は対象に向かおうとする。——しかしそれは「中間」を突破して、対象と一体化してしまう程「近く」になってしまうのである。瞬間的に対象と一体化していた熊楠は、再び「分離」し、他者から「遠く」離れた場所に自己をポジション設定する。——熊楠の「在り方」には、このような循環が見られるのである。結局、熊楠という人間は、常に我々のように「適当な距離」に留まることができなかつたのだ。

「中間」とは一体何なのか——この問いが熊楠を捕えて離さなかつた。この世でもありあの世でもある夢²⁾。外的・物的要因と内的・心的要因が交わり合って生じる夢。熊楠は何とか「極端」と「極端」の「間」を解きほぐし、「中間」を知ろうとしたのではないだろうか。そして何とか自分をそこに位置づけようとしていたのではないだろうか。

熊楠が、我々に対して、対象との一体化や「個」の消去法などを強要することは、決してない。熊楠にとって、それらはごく自然な事柄であって、むしろ我々のように常に「中間」を保持しているという事柄の方が不思議であり、関心があつた。

したがって媒語は、両方の極を互いに表象し、一方の他方に対する相互的な奉仕者〔僧侶〕であるようなものである。この媒語はそれ自身意識されたものである。

[Hegel 1807, 檜山訳 1997 : 262]

²⁾ 熊楠は、夢に関して、以下のような興味深い言説を残している。

扱烏羽玉の『夢』てふ物は死に似て死に非ず生に似て生に非ず、人世と幽界の中間に位する様な誠に不可思議な現象で種々雑多の珍しい問題が夢に付て断ず叢り居る。

[1918年11月～12月「夢を替た話〔南方先生百話〕』『牟婁新報』]（南方熊楠顕彰館所蔵）
ここで熊楠は、夢を生と死の〈中間〉、またはこの世とあの世の〈中間〉であると述べているのである。

ここでヘーゲルが言う「両方の極」とは、「自己」と「不変者（神）」である。そして、熊楠は、我々と不変者を結ぶ、上記で言うところの「奉仕者〔僧侶〕」、言い換えるなら、我々と不変者（神）を取り持つ存在者であったのかもしれない。しかし、熊楠自身はそのことを全く意識していなかった。イエス・キリストや、その他の予言者と異なる点はそこにある。熊楠は（「僧侶」のように）我々に対して、不変者との同化を促すようなことはなかった。もし熊楠が、自身を、我々と不変者を引き合わせるような存在者（いわば、神から選ばれた者）であると意識していたならば、ここまで「中間」にこだわり、そして夢を探究することはなかったであろう。

※

熊楠は、青年期から晩年に至るまで日記を書き続けた。項目は「天気」・「寒暖」・「本文」・「予記」・「発信」・「受信」などから成っている。独特の楔形の小さな文字で、ほぼ毎日書いている。「本文」に書かれている内容は多岐に渡る。起床時間・就寝時間・読書内容・人物の往来・採集記録……などである。その中でも、特に異彩を放っているのが、夢に関する記述である。

論考や書簡などとは異なり、淡々とした日記の記述の中でも、夢に関しては特に精細に書かれている。「〇時〇分起る、その前夢に……」、晩年はこの記述パターンが多く見られる。青年期には、夢の内容だけを記した日の日記もある。時に 1 ページに収まりきらず、別ページに渡って書いていることもある。図画を挿入することもしばしばであった。このような記述を見る度に、筆者は、「熊楠は、夢を追究する為に日記を書き続けたのではないか」とさえ感じるのである。

刊行されている『南方熊楠日記 1～4』（八坂書房 1987～1989 [1885～1913 年の日記を収録])を見るだけでも、凡そ 160 の夢に関する記述がある。現在（2012 年 1 月）、南方熊楠翻字の会を中心に翻刻中の 1914～1941 年の日記を合わせれば、その数は倍以上になるであろう。さらに、書簡・論考においても夢に関する内容を扱ったものが数多くある。

熊楠は夢の採集者であった。隠花植物や粘菌を採集し写生・記録したように、夢に関しても採集と記録を行っていたのだ。熊楠の「夢の思い出し方」には、独特な方法があった（第 1 章参照）。その方法を用いて、膨大な数の夢を集め、記録した。夢の記録は熊楠自身のものだけに留まらない。家庭を持つてからは、家族や女中が見た夢まで聞き出し、記

録している。なぜ、熊楠はこれほどまでに夢にこだわり続けたのか。夢を記録することで何を知らうとしたのか。また夢と「やりあて」（偶然の域を超えた発見や的中、熊楠の造語）はどれほど関係しているのか。そして、この「やりあて」はなぜ起こり得るのか——本研究が（特に第1～4章を中心に）射程に据えるものはこれらの問いである。

熊楠が夢に関して体系的に（理論的に）述べた論考はない。フレデリック・マイヤーズ（Frederick William Henry Myers 1843～1901年）の、『*Human Personality and Its Survival of Bodily Death part 1 & 2*』などからの引用や、自身の体験（正夢や夢のお告げ）などの、いわゆる「事実（事象）の列挙」ばかりである。従って我々は、熊楠の日記・書簡・論考における言説を注意深く読み取り、熊楠が夢に関してどのようなことを考えていたのか、紡ぎ合わせる必要がある。バラバラに散りばめられた「諸細目」を統合したとき、熊楠の夢に対する考え方が見えてくるはずである。

熊楠の夢に対する考え方は、彼の思想のコアである「南方曼陀羅」につながる。「南方曼陀羅」は、「事不思議」・「心不思議」・「物不思議」・「理不思議」・「大不思議」の五つのエレメントから成っている。熊楠は、「心（不思議）」と「物（不思議）」が交わる場である「事（不思議）」は、夢であることを述べている（第3章参照）。一方で、夢による「やりあて」は、第六感の働く「理不思議」において起りうることも述べている（第4章参照）。さらに、夢とは、「現実界（この世）」と全てが補完（統一）された世界（あの世・涅槃）との「間」の場所であるとも述べている（脚注2参照）。「統一」された世界とは、熊楠の言葉で言うならば「大不思議」である（第6章参照）。このように、熊楠の夢に対する考えは、「南方曼陀羅」（熊楠の思想の中核）と密接に関係しているのだ。故に、熊楠の夢に関する言説を考察することは、「南方曼陀羅」の考察にもつながるものと言えるのである。

熊楠の夢への言説、そして南方熊楠という人物そのものが教えてくれること——それは、一言で言えば「距離」である。熊楠は他者との関係において、特異な「距離」しか採ることのできない気質の持ち主であった。極端に「近い」か、極端に「遠い」か、そのどちらかであった。いわば「適当な距離」＝「中間」における「自己—他者」関係を採用することが非常に苦手だったのだ。そのような点から、筆者は熊楠を「極端人 **Extreme Person**」（筆者の造語）と呼びたい。しかし、そのようなラジカルな「距離」しか採れなかったことが、彼の超人的なパワーの源でもあった。日本民俗学の父・柳田国男（1875～1962年）は、

熊楠を評して「日本人の可能性の極限」とまで言っている。

「適当な距離」を当たり前のようにとっている我々は、普通、それを深く考えることはない。「極端人」であった熊楠の言説・生き方は、この「適当な距離」とは一体何なのかを我々に深く考えさせるものである。この「適当な距離」は、果たして本当に「正常」なのか、「絶対的」なものなのか、あるいは我々マジョリティーの単なる「妄想」なのか。つまり大多数が信じているが故に優勢を占めているだけのものなのではないのか——熊楠の夢への言説・生き方・在り方は、我々の「常識」に疑問符を投げかける。我々にとって近くにありすぎて、あまりにも身近すぎて、見落としているものを、熊楠は我々に気付かせてくれる。同時に、我々個々人の生（個的生命）に含まれながらも、それを越え出てさらに大きく包み込んでいる場＝「統一〔根源的な場〕」、もっと言うならば「生命そのもの」（それは人間にとって、最も「近く」にあるが故に、最も「遠い」ものでもある）とは何かについて知る手がかりも与えてくれる（特に第5章～終章で詳述）。

第2節、先行研究

熊楠が夢に関心を示していたことは、以前から指摘されてきた。しかし、本格的にそれを扱った研究はなかった。

数少ない先行研究として、まず、夢と「事の学」の関係を土宜法龍宛書簡から明らかにしようとした橋爪博幸の『南方熊楠と事の学』（鳥影社 2005）がある。これまでの熊楠研究では、「事の学」は、それ自体独立して考えられる傾向が強かった。橋爪は、「事の学」の直前に記されている夢の記述に着目し、この夢が「事の学」に深く関係していることを明らかにしている。

松居竜五は『南方熊楠 一切智の夢』（朝日選書 1991）において、この「事の学」が「神話」や「伝説」に対する熊楠の研究方法に大きく影響していることを述べている。例えば、熊楠の論考である「ムカデクジラ論」や「神跡考」等を挙げ、これらを「事の学」の実践として捉えている。

夢と「やりあて」の関係について言及したものに、鶴見和子の『南方熊楠—地球志向の比較学—』（講談社学術文庫 1981）がある。鶴見は、熊楠の「やりあて」と「tact（適否

を見極める鋭い感覚)」に、いち早く着目した一人である。鶴見は、ポアンカレの事例（書齋で数日間考え続けて解けなかった問題を、急用ができて旅に出て、馬車に足をかけたとたんに、「フックス函数を定義するに用いた変換は非ユークリッド幾何学の変換とまったく同じである」という考えが、閃くように浮かんだという出来事）を挙げ、これは熊楠の「やりあて」と同じであると述べている。また鶴見は、『南方熊楠・萃点の思想』（藤原書店 2001）において、「やりあて」と「tact」を同義とし、このような熊楠の夢や、いわゆる「共時的体験」・「深層心理の働き」に対する言及は、C.G.ユングの考え方と類似点が多々見られると述べている。しかし、それはあくまで示唆に留まり、それ以上深くは踏み込んでいない。

武内善信は、論文「南方熊楠における珍種発見と夢の予告—安藤礼二『野生のエクリチュール』によせて—」（『和歌山市立博物館研究紀要』第 23 号 2009）において、熊楠のこの「やりあて」が事実であるか否かを、日記・書簡・論考を詳細に比較・検証し、その齟齬を明らかにしている。そして、熊楠のいわゆる「やりあて」を鵜呑みにすべきではないことを強調している。

夢と「幽霊」・「幻覚」については、中沢新一が『森のバロック』（せりか書房 1992）の中で取り上げている。中沢は、リーマンの空間論と熊楠による「幽霊」の考察における空間直観の類似性を述べている。噛み砕いて言えば、中沢は、熊楠は「幽霊」と夢との比較研究を通じて、三次元を超えた「高次元」について考えようとしたことを述べている。

近藤俊文は『天才の誕生—あるいは南方熊楠の人間学—』（岩波書店 1996）において、熊楠の幻覚などの体験を精神分析学の手法を用いて検証している。熊楠のいわゆる「精神変態」は、「側頭葉癲癇^{てんかん}」が大きく影響していることを述べている。

原田健一は『南方熊楠 進化論・政治・性』（平凡社 2003）の中で、三つの視点から、「幽霊」あるいは「精神変態」の現象について考察を行っている。まず、「癲癇」という病跡学的視点からの考察を行っている。次に、進化論における「心」の働きからの考察を行っている。熊楠は「人間以外の生物に何らかの意識、『心』の世界を認める進化論の影響を受け、動物も『幽霊』を見るなど、人間と他の生物の社会との連続した面を指摘している」と原田は述べている。最後に、「生命の網目」からの考察を行っている。原田によると、相互連関する生物世界の、目には見えない「生命の網目」の中へ直入する際、「幽霊」は現われると言う。

それぞれの労作は、さまざまな視点から、熊楠の夢、あるいはそれに類似する事例に切り込んでいる。筆者はこれらの研究を参考にしながら、さらに熊楠の夢の「根底」に迫りたいと考えている。つまり熊楠による夢の記述の「背景」である。なぜ熊楠はこれほどまでに夢にこだわる必要があったのか。その発端となった出来事は何なのか。なぜ熊楠は「やりあて」に注目するようになったのか。その発端となった出来事は何なのか。どのように夢の記述は変化し、熊楠は何を見出すことができたのか（プロセスと結論）。本研究ではこれらを明らかにしていく。本研究によって、これまでの南方熊楠という人物に、「夢の採集者」という新たな一面を付け加えることになるであろう。

熊楠と夢の関係を考える際、いわゆる「那智隠栖期」の日記と土宜法龍宛書簡を、無視することは決してできない。先行研究においても、やはりそれらが中心となって論が進められている。本研究においても、それらの重要性を十分に考慮しつつ、一方で、今まであまり注目されてこなかった記述にも光を当てたい。例えばその一つに、青年期から晩年に至るまで、恒常的に書かれている羽山兄弟に関する夢の記述がある（第2章参照）。

第3節、研究の方法

本研究の方法はまず、熊楠の「日記」から、夢に関する記述をサンプリングすることから始めた。夢には様々な意味がある。例えば「儂いもの」という意味であったり、「空想的な願望」という意味であったり「将来実現したい理想」という意味であったり、色々な意味を持つが、本研究では「睡眠中に見る夢」のみを対象としている。

- ① 『南方熊楠日記 1～4』（八坂書房 1987～1989）
- ② 岡本清造翻刻記録（南方熊楠顕彰館所蔵）
- ③ 中瀬喜陽『南方熊楠 昭和期の日記』（『季刊・文学第8巻・第1号』1997）
- ④ 『熊楠研究 6～8』（南方熊楠資料研究会 2004～2006）
- ⑤ 東京・南方熊楠翻字の会の翻刻分

以上から、夢に関する記述をサンプリングした。①からは、1885～1913年、②からは、南方熊楠顕彰館のマイクロフィルム及び現物の日記と比較しつつ1914～1925年の夢の記述を抽出した。③からは、昭和期の主な夢の記述、④からは、1919年、⑤からは、1941

年 10～12 月の夢の記述を抽出した。

次に、熊楠の「書簡」から夢に関する記述をサンプリングした。

- ① 『南方熊楠全集 1～10、別巻 1、2』（平凡社 1971～1975）
- ② 『熊楠研究 1～8』（南方熊楠資料研究会 1999～2006）
- ③ 『高山寺蔵 南方熊楠書翰 土宜法龍宛 1893－1922』（南方熊楠著／奥山直司・雲藤等・神田英昭編、藤原書店 2010）〔※データベース上では「高山寺資料」と略す〕
- ④ 『南方熊楠・小畔四郎往復書簡（1）～（3）』（南方熊楠顕彰館 2008～2010）〔※データベース上では「小畔四郎」と略す〕
- ⑤ 『南方熊楠・平沼大三郎往復書簡 大正 15 年』（南方熊楠顕彰館 2007）〔※データベース上では「平沼大三郎」と略す〕
- ⑥ 『南方熊楠書簡 盟友 毛利清雅へ』（中瀬喜陽、日本エディターズスクール出版部 1988）〔※データベース上では「毛利清雅」と略す〕
- ⑦ 『南方熊楠 門弟への手紙 上松翁へ』（中瀬喜陽、日本エディターズスクール出版部 1990）〔※データベース上では「上松翁」と略す〕
- ⑧ 「〔資料〕土宜法龍宛南方熊楠書簡」（紹介：武内善信、『和歌山市立博物館研究紀要』第 25 号 2010）〔※データベース上では「和歌山市立博物館研究紀要第 25 号」とする〕

以上の資料からサンプリングを行った。

「論考」については、以下の資料からサンプリングを行った。

- ① 『南方熊楠全集 1～10、別巻 1、2』（平凡社 1971～1975）
- ② 『南方熊楠英文論考・ネイチャー誌篇』（飯倉照平監修、松居竜五・田村義也・中西須美訳、集英社 2005）〔※データベース上では「英文論考」と略す〕
- ③ 『熊楠研究 1～8』（南方熊楠資料研究会 1999～2006）
- ④ 牟婁新報掲載論考「夢を替た話—南方熊楠先生百話」（南方熊楠顕彰館内の現物資料）

さらに、「日記」・「書簡」・「論考」からサンプリングした夢の記述をデータベース化した

(「巻末データベース資料」及び「付録 CD-R データベース資料」参照)。

「データベース資料」における、「日記 1」は、1885～1913 年の日記、つまり『南方熊楠日記 1～4』(八坂書房)を対象としている。「日記 2」は、1914 年以降 1941 年まで、つまり『日記 1～4』以外のもの(岡本清造翻刻記録など)を対象としている。項目は、「年月日 [曜日]」・「天気・寒暖」・「齢」・「夢の内容についての記述」・「夢に関する考察・雑感」・「夢に類似する事例」・「やりあて」・「近親者が見た夢に関する記述」・「備考」から成っている。「夢の内容についての記述」とは、熊楠自身が見た夢の内容である。「夢に関する考察・雑感」とは、熊楠が記した夢に対する考察、例えば「夢の出所」や「夢から覚めた時の状況(覚醒時の状況)」などの記述である。「夢に類似する事例」とは例えば「幽霊」や「幻覚」などの記述である。それぞれの記述がある場合、各項目に○印を付けた(熊楠自身が夢に見た以外のもの、経験した以外のもの=他者の言・書物等からの引用の場合●印を付けた)。

「書簡」の項目は、「年月日 [曜日]」・「齢」・「宛先」・「夢に言及」・「夢に類似した事例に言及」・「やりあてに言及」・「全集巻数」・「備考」から成っている。「夢に言及」は、熊楠自身の夢のみならず、夢への考察、他者が見た夢の内容なども含む。「夢に類似した事例に言及」は、「日記」同様「幽霊」や「幻覚」などへの言及である。しかし、「幽霊」・「幻覚」ともに、夢との関連で語られているもの、あるいは明らかに夢と同義であるものに限った。本研究ではあくまで夢に関係する・関連する・同義であるものを対象としている。「全集巻数」には、『全集』他、『熊楠研究』・『南方熊楠英文論考・ネイチャー誌篇』なども含んでいる。(これらから抽出した場合は、その都度それぞれの書名〔上述した略称〕を明示している。また「日記」同様、熊楠自身が夢に見た以外のもの、経験した以外のもの=他者の言・書物等からの引用のみの場合●印を付けた)。

「論考」の項目は、「発表年月日 [曜日]」・「論考(名)」・「夢に言及」・「夢に類似した事例に言及」・「やりあてに言及」・「全集巻数」・「(掲載)雑誌・新聞名」・「備考」から成っている。「夢に類似した事例に言及」は、「書簡」と同じ原則を用いた。「全集巻数」も、「書簡」と同じ要領である(また「日記」・「書簡」同様、熊楠自身が夢に見た以外のもの、経験した以外のもの=他者の言・書物等からの引用のみの場合●印を付けた)。

「日記」では、夢に関する言及がある場合、その日の日記の全文を抜き出し、「年 月 日 [曜日]」からリンクを張った（付録 CD-R 仕様）。さらに、「書簡」・「論考」にも同様、あるいは関連する夢を記載している場合、その記述へリンクを張った（他箇所へのリンクがある場合、「年 月 日 [曜日]」の横に § 印を記した）。「日記」の記述と「書簡」・「論考」の記述を比較検討できるようにするためである。

「書簡」・「論考」においては、「備考」の項目からリンクを張っている。上述の通り「日記」における夢の記述と同様、あるいは関連する内容がある場合、それらを見る事が可能である。その他、熊楠の「夢」あるいは「夢に類似する事例」に非常に大きな影響を与えたと思われる、マイヤーズの、『ヒューマン・パーソナリティー *Human Personality and Its Survival of Bodily Death part 1 & 2*』（『Human Personality』と略す）に関する言及がある場合、その箇所を見る事ができるようにもした（付録 CD-R 仕様）。

データベース上の「齢」は数え年である。また、夢の記述であるか、夢に類似する事例か、あるいは「やりあて」であるか、判別がどうしても困難な個所は「？」を記した。未刊行日記等において、夢の記述があるものの、現時点では判読が困難なものについては〔保留〕とした。

 南方熊楠 Kumagusu Minakata A Study of His Descriptions of Dreams の記述に関する研究 -「やりあて」と関連させながら-		(付録「CD-R データベース資料」サンプル)							
日記1		日記2へ		論考へ		書簡へ		目次へ	
1888年 1889年 1891年 1893年 1894年 1895年 1896年 1897年 1898年 1899年 1900年 1901年 1902年 1903年 1904年 1905年 1907年 1908年 1909年 1910年 1911年 1912年 1913年									
年 月 日 [曜日]	天気・寒暖	齢	夢の内容についての記述	夢に関する考察・雑感	夢に類似する事例	やりあて	近親者が見た夢に関する記述	備考	
1888年(明治21年)									
1888年6月16日[土]	晴	22	○					羽山蕃次郎の夢	
1888年10月30日[水]	晴	22	○	○				故谷富次郎の夢	
1888年12月2日[日]		22	○					利光平夫の夢	
1888年12月9日[日]	陰	22	○					西村惣助の夢	
1888年12月13日[木]		22	○					清原彰甫の夢	
1889年(明治22年)									
1889年1月11日[金]	陰	23	○					羽山蕃次郎の夢	
1889年2月21日[木]	晴	23	○	○				覚醒時の状況明記	
1889年3月5日[火] §	晴	23	○	○				覚醒時の状況明記	
1889年3月15日[金]	晴	23	○	○				覚醒時の状況明記	

このデータベース資料を基に、本稿を執筆した。データベース資料は、本研究の基礎となっている。特に第1章及び第3章は、このデータベースに依るところが大きい。また今後、熊楠の夢に関する研究を行う研究者に対しても、このデータベース資料は有効な基礎的資料となると考えている。本データベース資料は、本稿と共に、筆者のもう一つの成果である。

第4節、本稿の構成

本稿の構成を以下に示す。

〈第1章 夢の記述、その方法と経緯〉

第1章ではまず、熊楠の夢の記述方法（及び熊楠独自の「夢の記憶法」）と、その記述の経緯を概観する。また、覚醒後も、夢か現実か区別のつかないことの多かった熊楠の様子を、彼の日記の記述から見ていく。熊楠はしばしば、非常にリアリティーをもった夢を見ている。そして、熊楠の日記からは、夢の世界から必死に現実世界に戻ろうとする彼の姿が見て取れるのである。つまりそれは、自他融合の場に近い自他不鮮明な場から、もとの区別ある状態へ引き返そうとする、あるいは自己の「ポジション」を再確定しようと翻弄する姿である。そして、もし熊楠がこの「退路」を見失ってしまったら、果たして彼には何が待っていたのかを、「無」と「不安」から考察する。次に、熊楠の日記における、夢の記述の変遷を見ていく。1888年から晩年（1941年）まで続く夢の記述において、最も恒常的に見ている事柄は、羽山兄弟（繁太郎・蕃次郎）に関するものであった。「やりあて」に関する記述は、「那智隠栖期」以降、急激に増えている。夢の原因——「覚醒時の周りの状況」・「夢の出所」——についても、生涯変わらず記録し続けた。

以上を踏まえた上で、第2～4章では、熊楠が夢を記録し続けた理由と、「やりあて」と夢の関係を中心に考察する。そして、第5章と第6章では、熊楠の夢と関連させながら、特に熊楠の「在り方」へアプローチし、さらに「生命そのもの（根源的な場）」とは何かを問う。終章では、自己と他者とがいわゆる「適当な距離」において交わる処を「中間」とし、「全てが統一された世界」と「現実界」の間にありつつも両者が混じり合う場を〈中

間) として上で、熊楠の「ポジション」について論ずる。

〈第2章 熊楠と羽山兄弟—intimateな関係—〉

第2章では、熊楠の夢の記述の中でも、特に多く登場する羽山兄弟を取り上げる。熊楠の日記における夢の記述は、羽山兄弟に関する事で始まり(1888年6月16日)、羽山兄弟に関する事で終わる(1941年11月30日)。熊楠と羽山兄弟は「intimate friend」、つまり「深友」であった。羽山兄弟は、熊楠が在外中に夭折するが、この「絶対的他者」の喪失が、熊楠に何をもたらしたのかを、ヘーゲルの哲学及びC.G.ユングの深層心理学(元型論)を援用しながら考察する。そして、羽山兄弟とは、熊楠の欠落した部分を完全に補う「アニマ」であったことを示す。そのことが、熊楠による、採集・観察行為にも大きな影響を与えていたことを明らかにする。熊楠は、夭折した羽山兄弟の「代替者」(ロンドンの或るバーメイドや熊楠邸の借家に住んでいた子ども)を作り出す。しかし結局、熊楠は、彼らから「跳ね返される」(あるいは熊楠自身が彼らを「跳ね返す」)ことになる。そのことによって、熊楠が得たものとは、一体何だったのかを論ずる。

〈第3章 「事」としての夢〉

第3章では、特に筆者が作成した「データベース資料」を参照にしながら、熊楠の夢の考察が、どのように「事の学」へと昇華し、さらにその後どのように展開していったのかを述べる。「心」と「物」が交わる「事」たる夢を、熊楠が日記にどのように記述していたのかを中心に見ていく。熊楠が、「事」たる夢を、ここまで執拗に追究した本当の理由を明らかにする。我々にとっては「内的・心的要因」と「外的・物的要因」が交わり、夢が現出するという事は、さほど不思議なことではないように思われる。なぜなら我々は、自己(心)と他者(物)が適度に交わる「場」について、殆ど深く考えたことがないからである。いや、考えるまでもなく、そのような「適当な距離」を保持してしまっているのだ。一方、熊楠と対象の「距離」は、極端に遠いか、極端に近いか、あるいは、自己(心)と他者(物)が全く分離する程離れているか、ぴったりと合わさってしまう程接近しているか、そのどちらかであった。故に熊楠にとって、両者が適度に交わる「事」とは、極めて不思議な出来事だったのである。熊楠には常に、夢の世界から現実の世界へ戻ることがで

きなくなるのではないかという懸念があった。いつも「退路」を見失うことを憂慮しなければならなかった。熊楠にとって、「現実界」に戻り、自己を「ポジション設定」するためには、現実の世界と夢の世界の特徴をはっきり見極めておく必要があったのである。夢と現実の違いを当たり前のようにわかまえている我々とは異なり、熊楠にとってそれは、全く当り前の事柄ではなかったのだ。熊楠が執拗なまでに夢の原因を追究し続けた理由の背景には、「適当な距離」が保持できないという切実な問題があったのである。熊楠は、「適当な距離」において空談するような「世人 *das Man*」にはなれなかった。そのような熊楠の抱えた「不安」と我々の「不安」の相違を、本章の最後で考察する。本章では、未だ刊行されていない、1914～1925年及び1941年の日記の記述については、故・岡本清造氏が翻刻したノート及び、筆者も所属する南方熊楠翻字の会で翻刻した記録に依った。

〈第4章 夢と「やりあて」〉

第4章では、マイケル・ポランニーの「暗黙知」・「潜入・内在化 *indwelling*」、C.G.ユングの「集合的無意識」の考えを取り入れ、熊楠の（夢などによる）「やりあて」が、いかにして可能になったのかを中心に述べていく。熊楠の言う「*tact*」を、「熟練能的*tact*」と「生得的*tact*」に分け、「やりあて」の質について考察する。「*tact*」とは「適否を見極める鋭い感覚」などと訳される。その「*tact*」を発揮し「やりあて」するには、長年の熟練が必要である。例えば、いわゆる「職人技」などはそれにあたる。つまり「職人技」などには「熟練」によって鍛え上げられた「*tact*」が必要なのである（＝「熟練能的*tact*」）。一方、例えば「死の予知」、これも「やりあて」と言えるものだが、それには「熟練能」は必要ない。むしろ、生まれ持つての素質（*innateness*）がものを言う。「生得的な」素質による「*tact*」が必要なのである（＝「生得的*tact*」）。さらに筆者は、「熟練能的*tact*」による「やりあて」を、「発見的創造」と「芸術的創造」に分類した。前者は、「*indwelling*（対象への潜入・内在化）」→「（諸細目の）統合」→「ひらめき」→「行為」→「やりあて」という段階を経るものであり、後者は、自我を瞬間的に滅却し対象と一体化することによって成し遂げられるものである。本章では、両者のプロセスを、図を用いて検証する。次に、「生得的*tact*」による「やりあて」である「死の予知夢」を、熊楠が経験した事例から考察する。また、どのようにしてこの種の「やりあて」が可能になるのかを、ユ

ングの「共時性」の概念を手掛かりに論ずる。そしてこの「やりあて」が可能になる場こそ、「南方曼陀羅」で言うところの「理不思議」であったことを示す。最後に、熊楠にオカルティズムへの考え方を一変させた、マイヤーズの『ヒューマン・パーソナリティー』とはどのような書物であったのかを見ていく。同書は未だ翻訳（和訳）出版されていない。ここでは、熊楠が自身の論考において同書を参照にした箇所を和訳し載せた。今後、マイヤーズ及び心霊現象研究を行う者に対して、意義ある資料となると思われる。

本章で筆者が主張したいことは、「やりあて」や「テレパシー」、「ラポール」といった現象の有無ではなく、それらを脳科学などに丸投げせず、哲学的に考えることが、人間の「在り方（自己—他者関係）」を深く知るための鍵となり得るということである。

〈第5章 熊楠の採集・観察行為〉

第5章では、熊楠の「やりあて」、特に筆者が言うところの「熟練能的^{s k i l l e d}tact」による「やりあて」を考察する際、欠かすことができない事柄——熊楠と対象との在り方——について述べる。熊楠による「採集」と「観察」という行為を、S.フロイト、メラニー・クライン（Melanie Klein 1882～1960年）の言う「投影同一化」と「取り入れ同一化」をキーワードに考察し、南方熊楠という人物そのものに迫りたい。熊楠が、粘菌、特に原形体に見出していたものとは何だったのか。それは、熊楠自身に欠けたもの（アニマ）であった。熊楠はそれを取り入れ、あるいは自分自身をそれに投げ入れることで、「完全性（統一）」を希求したのである。しかし、この「統一」はすぐに「分裂」する。それはなぜなのか——この問いについて、ヘーゲルの言う「無限性」をヒントに考察する。熊楠は、他者から極端に離れてしまうため、「奇人」・「変人」と呼ばれることがあった。そしてあまりにも離れすぎた「距離」に自ら気づき、それを埋めるため、そして完全な自己像を求めて、再び「採集」・「観察」へのめりこんだ。このような繰り返しが熊楠の生き方には如実に見られる。熊楠と対象との関わり合いを深く考察していくとき、これまで多くの書物等で語られ、そして我々の多くがイメージするようになった、彼に対する「強靱な精神を持った森の巨人像」とは全く正反対の、「狂人」を恐れながらも常にその近くにしかいることができなかつた「不安定な自我の持ち主」という一面が見えてくるはずである。熊楠は常に、自我の消滅・人格の死と隣り合わせにいたと思われる。それは熊楠にとって苦しみでもあつたで

あろう。しかし、そのことが南方熊楠という人物を極めて特異で魅力的なものにしていることも確かである。

〈第6章「大不思議」—根源的な場をめぐる—〉

第6章では、「南方曼陀羅」解釈における最大の難関、「大不思議」とは何かについて論ずる。(夢などによる)「やりあて」が可能になる場を「理不思議」としたとき、その領域と、「大不思議」との関係はどのようになっているのかを、さらに熊楠の立っていた「場所」とはどのような処だったのかを、「通路」(ヴァルター・ベンヤミン Walter Bendix Schönflies Benjamin 1892~1940年)の概念³⁾を用いて考察する。さらに、「大不思議」こそ、全てがそこから生まれ、全てがそこへ帰還する「根源的な場(生命そのもの)」であることを、熊楠の言葉から明らかにする。簡単に言えば、「理不思議」とは、自己と他者の区別が不鮮明になる領域(ユングであれば、そこを「集合的無意識」と言うであろう)であり、「大不思議」とは、自己と他者が完全に融合した領域である。自他が融合した「根源的な場」からの「力」を感じつつも、まだかろうじて「自己」であることが可能な場、これこそが熊楠の言う「理不思議」という領域であった。本章では、そこにおいてこそ「やりあて」が可能になることを明示する。熊楠は、自己と他者の区別が不鮮明になる場(理不思議)に、しばしば立っていた。彼は統合失調症に極めて親近性のある気質の持ち主だったように思われる。自己と他者の境界が不鮮明になっている統合失調症者は、かつて「自己規定」されていた(自己と他者が明確に区別されていた)場所へ戻ろうとして苦しむ。自他が不鮮明な場所に留まることは、「現代社会」においては「異常」とされるのである。

³⁾ ベンヤミンは「パサージュ(通路)」を、「商店であり住居」、「家であり道路」とし、それを両義的なものとして位置づける。それは、単なる「道路」ではない。両極の特性が未だ残りながらも混じり合う、ある種「特殊な場」なのである。ベンヤミンは、以下のように述べる。

パサージュはそのなかでわれわれが、われわれの両親の、そして祖父母の生をいまいちど夢のように生きている建築物なのだ、ちょうど胎児が母親の胎内で、動物たちの生をいまいちど生きているように。

[Benjamin 1928~1940, 今村訳、『パサージュ論』1巻 2003:238]

「パサージュ」——そこでは、祖先の生と、現在を生きる我々の生が混じり合う。そこは、人間か動物かまだ区別つかないものが蠢く「母胎」のようなものである。両項の区別が不鮮明になり、また両項の特性が混じり合う処、それが「通路」なのである。またベンヤミンは、パサージュ論の目的は、端的に「根源」の探求だと述べている。

ところで、私がパサージュ論で行おうとしているのも根源の探求である。

[Benjamin 1928~1940, 今村訳、『パサージュ論』3巻 2003:184]

我々人間は、「通路」から、「根源的な場(生命そのもの)」を知り得るはずである。なぜなら「通路」こそが「現実界(個々の生命が実際に生命活動を行う場)」と「根源的な場」を、まさに向かい合わせ、混じり合わせる場＝〈中間〉だからである。

しかし、もし自己と他者の区別が不鮮明な場が、「生命そのもの」（「根源的な場」、つまり自己と他者が完全に融合した場）に最も近い処であるとするならば、「異常」を有しているのは、実は我々の方なのではないだろうか。自己と他者の「区別」を徹底化し、そこに安住しようとするのは果たして「正常」なことなのだろうか。「統一（根源的な場）」こそ「真」であるならば、そこから完全に離れ、さらにそこから目を背けようとするところこそ「異常」なことではないだろうか——。本章では、熊楠の居た「ポジション」を通して、このような問いを呈する。我々は、「大不思議」という「根源的な場（統一）」から分離し、各々「個人」の生を営んでいる。とはいえ、やはり我々は、この「根源的な場」に根ざしてもいる。だからこそ、我々はこの「根源的な場」への問いを発することができるのである。本章では、熊楠による「大不思議」への言説を基に、人間の「在り方」を考察する。

以上の考察から、終章において結論を導き出す。

〈終章「中間」と〈中間〉—熊楠のポジションについて—〉

終章では、「中間」と〈中間〉の位相の^{ポジション}違いと、熊楠の居た「場所」を議論の中心に据える。簡単に言えば、「中間」とは、自己と対象とが「適当な距離」にある場所であり、〈中間〉とは、「自己と対象が統一された場所」と、「現実界」の「間」の場所である。熊楠は、ある論考において、「夢というものは、この世（現実界）とあの世（統一・無）の〈中間〉に位置するものだ」という、興味深い言葉を残している（脚注2参照）。「統一」とは、楽園（エデンの園）でもあり、狂人（無）の域でもある。熊楠は、ふとした瞬間に自身の「アニマ・片割れ」と同化し、この「統一」へと入りこんでしまうような気質の持ち主だった。そのような熊楠が、生涯をかけて「中間」を求め続けた真の理由を明らかにする。さらに、「個的生命」と、「生命そのもの」の関係を、「南方曼陀羅」を基に考察する。「事」という「中間」領域は、自己（心）が他者（物）と適度な関係を持てる処である。いわば、我々「個的生命」が生きている日常世界でもある。そして、この「個的生命」に含まれながらも、それを^{バサージュ}越え出てもいるものが、「生命そのもの」（根源的な場）である。それは「南方曼陀羅」で言うところの「大不思議」にあたる。さらに、「個的生命」が営まれる場と「生命そのもの」は、両者の〈中間〉である「理不思議」という「通路」によってつながっている（結合させられている）ことを示す。熊楠は、この両者が混在する「理不思議」に、

身を置くことができた。——以上の考察を踏まえ、この「^{パサージュ}通路」こそが、人間の「在り方」を探究する際、最も重要な鍵であるという結論を導き出す。補遺では、熊楠の最晩年の夢を、彼の近親者の言葉から紹介する。

〈データベース使用例〉〈データベース資料〉〈付録 CD-R データベース資料〉

データベース使用例では、付録 CD-R の「[データベース資料] 南方熊楠 夢の記述に関する研究—「やりあて」と関連させながら—」の使用方法を説明する。巻末にはデータベース資料（「日記 1」〔1885～1913 年の日記〕・「日記 2」〔1914 年～1925 年、1941 年〕・「書簡」・「論考」）を添付した。付録 CD-R データベース資料は、関連項目からリンクを貼り、夢に関する記述の全文・抜粋を PC 上で閲覧することができるようになっている。また、熊楠の夢に登場する人物の詳細（経歴、熊楠との関係など）も見ることもできるようにした。さらに、年ごとに「熊楠にまつわる主な出来事」も閲覧できるようになっており、本データベース資料は、熊楠に関する、いわば「総合事典」的役割を果たすものとなっている。

参考文献

- ・ 桑原武夫「南方熊楠の学風」、1972（飯倉照平編、『南方熊楠 人と思想』、平凡社、1974 所収）
- ・ 神坂次郎、『縛られた巨人 南方熊楠の生涯』、新潮文庫、1987
- ・ 近藤俊文、『天才の誕生—あるいは南方熊楠の人間学—』、岩波書店、1996
- ・ 武内善信、「南方熊楠における珍種発見と夢の予告—安藤礼二『野生のエクリチュール』によせて—」、『和歌山市立博物館研究紀要』第 23 号、2009
- ・ 鶴見和子、『南方熊楠・萃点の思想』、藤原書店、2001
- ・ 鶴見和子、『南方熊楠—地球思考の比較学—』、講談社学術文庫、1981
- ・ 中沢新一、『森のバロック』、せりか書房、1992
- ・ 橋爪博幸、『南方熊楠と事の学』、鳥影社、2005
- ・ 原田健一、『南方熊楠 進化論・政治・性』、平凡社、2003

- Hegel, G. W. F. *Phänomenologie des Geistes*, 1807／邦訳：檜山欽四郎、『精神現象学（上）』、平凡社、1997
- Benjamin, Walter Bendix Schönflies, *Das Passagen-Werke*, 1928～1940／邦訳：今村仁司、『パサージュ論』1、3巻、岩波現代文庫、2003
- 益田勝実「野の遺賢」、1968（飯倉照平編、『南方熊楠 人と思想』、平凡社、1974 所収）
- 松居竜五、『南方熊楠 一切智の夢』、朝日選書、1991